

シルバー・コア（仮称）再考

—— エイジング・イン・プレイスに求められるもの ——

Reconsideration of ‘Community Facility for the Elderly Called “Silver Core”’

—— Requirements for “Ageing in Place” ——

中 西 眞 弓

キーワード：エイジング・イン・プレイス、高齢者コミュニティシステム、介護負担軽減

要 旨

高齢者が住みなれた家や街で住み続けることを目指す「エイジング・イン・プレイス」の考え方は高齢者の本質的な欲求を示す考え方ではあるものの、少子高齢社会において役割が弱体化した家族に対して大きな負担を強いるものとなっている。「エイジング・イン・プレイス」を実現するためには、高齢者が単独で居住していても孤立することなく安心して生活できる基盤を整えること、生きがいや楽しみを持つことができること、そして家族への介護負担を軽減することが不可欠であると考え、そのひとつの方法として、シルバー・コア（仮称）というコミュニティシステムを提言するものである。シルバー・コアは、すべての高齢者が一定期間毎日通う中心的コミュニティ施設でもあり、住居とケアを切り離すことによって居住の自由度を高め、高齢者コミュニティを活性化させ、さらに介護負担を軽減するものとして期待する。

1. 高齢者とストレス

近年、高齢者の犯罪が大きな社会問題として取り上げられることが多くなった。2013年12月に発表された警察庁・警察政策研究センター及び慶應義塾大学・太田達也教授による共同研究報告書によれば、高齢者の人口10万人当たりの犯罪発生率そのものが上昇しており、近年の高齢者犯罪の増加は、高齢者人口の増加による自然増ばかりでなく、高齢者が犯罪そのものを犯しやすくなっていることが原因であるという。またその大半は万引を中心とした窃盗や占有離脱物横領といった財産犯であるが、高齢者による凶悪犯や粗暴犯についても犯罪者率が増加する傾向にあることが指摘されている¹。

中でも、以下の3点は特に注目される点である。第一に、強盗や詐欺では圧倒的に一人暮らしの割合が高く（図1）、殺人・傷害・窃盗でも一人暮らしの割合が高い。高齢犯罪者は全般的に一人暮らしの割合が高いことである²。第二に殺人の場合は同居人との関係に問題が多く

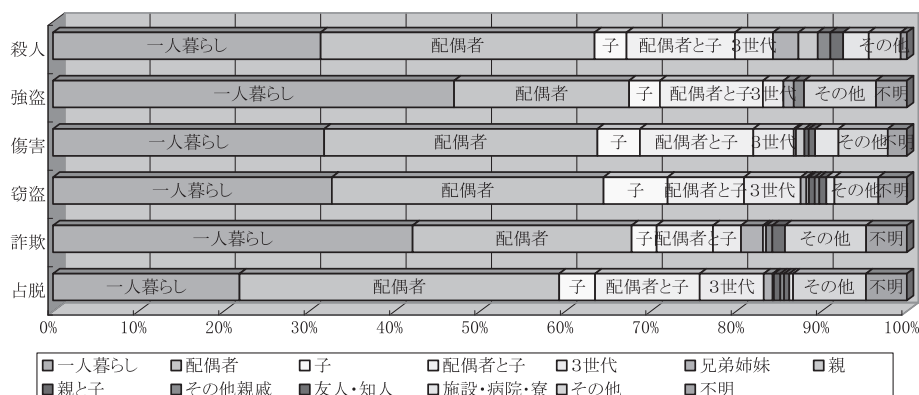
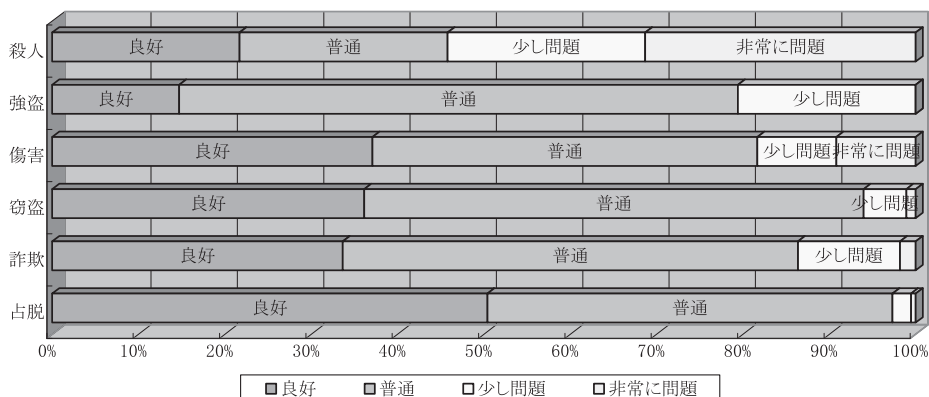


図1 高齢犯罪者の同居人の構成
高齢犯罪者の特性と犯罪要因に関する調査（註1）P128より



注：不明の場合を除く。

図2 同居人との関係
高齢犯罪者の特性と犯罪要因に関する調査（註1）P129より

（図2）、殺人の被害者が親族である場合が多いことである。そして第三は、子どもとの接触がほとんどない高齢者の場合に犯罪が多発していることである³。

また法務省の『平成20年度犯罪白書』でも、第二部「高齢犯罪者の実態と処遇」の中で、高齢犯罪者増加理由を社会的な孤立や経済的な不安といった深刻な問題を抱えていることと分析し⁴、そのための対策として「何よりもまず彼らの生活の安定を確立した上で、社会の中で孤立させることなく安らぎと生きがいのある生活を提供することが極めて重要である⁵」と指摘されており、高齢者の福祉制度の拡充や、住まいの保障、生きがいや就労、地域社会の協力体制にまで言及している。高齢者がストレスを多く抱える社会であることへの警鐘であるといえる。

一方、厚生労働省の実施している国民生活基礎調査によれば、2013年度に初めて介護が必要

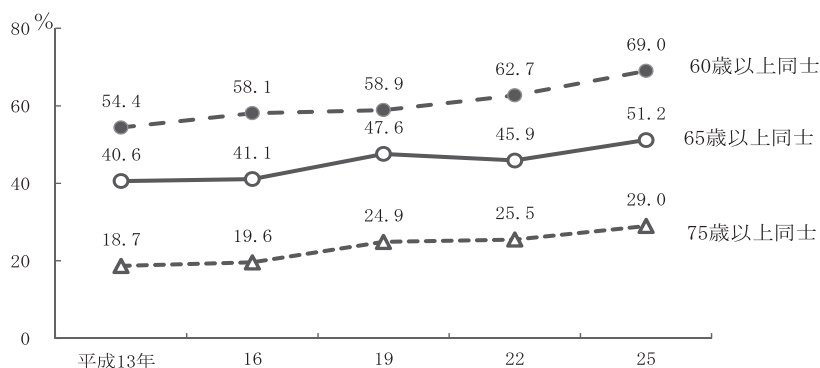
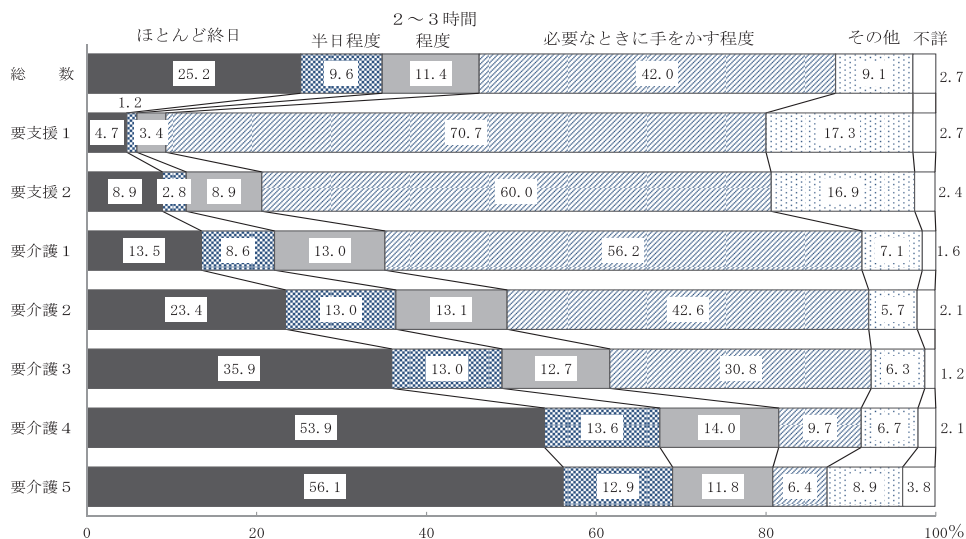


図3 年齢別にみた同居の主な介護者と要介護者の割合の年次推移
平成25年国民生活基礎調査の概況（厚生労働省）より



注：「総数」には要介護度不詳を含む。

図4 要介護度別にみた同居の主な介護者の介護時間の構成割合
平成25年国民生活基礎調査の概況（厚生労働省）より

な高齢者がいる世帯のうち、介護する人も65歳以上であるという、いわゆる「老老介護」の世帯が半数を超えた（図3）⁶。また、要介護者のいる世帯の状況をみると、「核家族世帯（夫婦のみ世帯を含む）」と「単独世帯」が増加傾向にあり、「三世帯世帯」は減少している。そして、要介護度の高い者のいる割合は「核家族世帯」「三世帯世帯」に多くなっている。現在の高齢者介護が家族によって大きく支えられているといえる。要介護度3以上になると、同居介護者は終日介護にかかりっきりの状況であり（図4）、その負担はかなり重い⁷。同居の主な介護者については当然のことながら、自身の病気や介護に関する悩みやストレスが多く、介護者の肉体

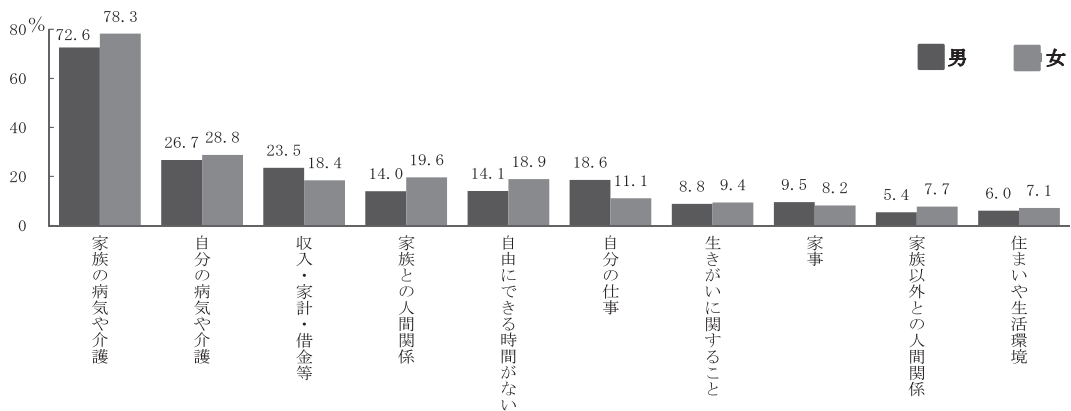


図5 性別にみた同居の主な介護者の悩みやストレスの原因の割合（複数回答）
平成25年国民生活基礎調査の概況（厚生労働省）より

的な負担の大きさとともに、精神的にも大きな負担を背負っていることがわかる（図5）。

2. エイジング・イン・プレイス（地域居住）理念について

近年、高齢者が住み慣れた地域社会の中で安心して暮らすことを目指すエイジング・イン・プレイスという言葉をよく耳にするようになった。この理念は、1992年にパリで開かれた経済開発協力機構（OECD）の社会保障大臣会議における高齢者ケア議論の中で取り上げられたことから広まったといわれている⁸。高齢者一人ひとりにとって最もふさわしい場所、つまり、住み慣れた地域社会を基盤として安全で安心な老後生活を過ごそうという考え方と紹介されている。『エイジング・イン・プレイスと高齢者住宅』の著者である松岡洋子氏は、この概念の生まれた背景には、安易な施設への入所に対する反省から生まれたものであり、「エイジング・イン・プレイスとは『高齢者が虚弱化とそれに伴う問題にもかかわらず、住み慣れた自分の家や地域でできるだけ長く住むこと。施設への入所を遅らせたり、避けたりすることができる』と定義されるものである。」と述べている⁹。

このエイジング・イン・プレイスの理念が紹介されるまでは、このような考え方はなかったのであろうか。松岡氏も述べているように、この考え方そのものは古くから存在した。

1950年代にデンマークの行政官バンク＝ミケルセンが提唱したことで知られる「ノーマライゼーション」は、もともと知的障害者収容施設での人権侵害などに対し、改善を求めるために提唱されたものである。障害を持っていても地域社会で普通の暮らしを実現するという脱施設化に大きく貢献した。その後辞典に「障害者や高齢者がほかの人々と等しく生きる社会・福祉環境の整備、実現を目指す考え方」¹⁰として紹介されるように、対象は知的障害者にとどまらず、障害者全般、そして社会的弱者としての高齢者へと広まっていった。現在は、社会福祉の基本理念として、高齢者を含む「すべての人が、基本的人権を尊重されながら、社会で自己選

扱や自己決定に基づいて生活できること、と幅広く解釈されるようになっている」と言われている¹¹。

このようにノーマライゼーションの理念が幅広くとらえられるようになりながら、一方でエイジング・イン・プレイスの理念が大きな広がりを見せている背景には、高齢者問題がより深刻化を増していることに他ならない。

福祉先進国といわれるヨーロッパの多くの国々が、高齢者の住宅保障として老人ホームのような収容施設を大量に供給することから脱し、その政策を変化させてきたのはかなり早い時期である。イギリスのタウンゼントは1962年にすでに施設収容に対する批判を行っており、1948年からイギリスで建設が進んだ「ワーデン（生活援助員）」つきの「シェルタード・ハウジング」はエイジング・イン・プレイスを目指す高齢者住宅の一つであると前出の松岡氏も述べている¹²。このシェルタード・ハウジングは1977年時点で、すでにイギリスの高齢者向け住宅の中心的存在となっており、公営住宅を中心に約22万個のストックを有していたという。スウェーデンでも1950年代にすでに「在宅主義」「在宅に住み続けられること」が大きな政治目標として掲げられ、サービスハウスやナーシングホームが整備されていった。スウェーデンでは、それだけでなく、1980年代半ばには一方的な脱施設化に批判が起こり、エーデル改革を経て、施設の住居化へと道を進めている¹³。エイジング・イン・プレイスの理念が広まったといわれる1990年より以前に、すでにヨーロッパでは脱施設化への風潮が広まり、そして「地域に拠点をおくサービス」への流れはできていた。しかしながら、そこには、オイルショックを契機とする財政上の理由が伴っていたことは明らかであり、そのため、「自宅では十分なケアが受けられないため、施設に戻る」という現象も生じている。

それでもなお、エイジング・イン・プレイスの理念が広がっているのは、一つには、高齢者自身が住み慣れた住まいや街で住みつづけたいという本質的な欲求を持っていることが、多くの人に賛同されているためであろう。

1988年に岸本幸臣氏は、『迫りくる高齢化時代 ―あなた自身の住まいと暮らし―』の中で、福祉先進国といわれる諸国にみられる制度や理念の直輸入に対し苦言を呈している¹⁴。我が国の家族というものの考え方、ボランティアの存在、地域コミュニティの機能、生活全般に対する社会保障の充実度、こうした背景にある相違を克服しないで高齢者住宅の政策だけをまねることは危険であると述べている。初期の施設収容型の高齢者住宅は、経済的効率を優先させた考え方に基づいているが、そうした施設収容の集約型の高齢者住宅対策さえも満足に行えない状況の中で、高齢者が自分の住まいで終末を迎えることの良さを強調し、さらには、日本型の三世同居や扶養義務という儒教的価値観を都合よく持ち出すことに対する危惧を示している。

エイジング・イン・プレイスについても、この理念が、高齢者自身にとってだけでなく、行政や企業にとっても好ましいから広まったのだということを忘れてはならない。そしてそれは

すべての人に好ましい理念なのであろうか。スウェーデンの一方的な脱施設化への反論や、岸本氏の批判は、すべての人に好ましいものではないこと、つまりそのために必要な社会的整備の必要性や、要介護者を抱える家族の視点が忘れられがちであることを示している。

3. シルバー・コア（仮称）とは

1980年代は有料老人ホームが急増し、一つのライフスタイルを確立した時代であった。少し高額ではあるが、子どもに頼らずに気ままな生活ができ、終末介護も任せることのできるものとして大きな期待を集めていた。1981年「完全参加と平等」をテーマとした国際障害者年をきっかけに我が国の福祉は大きな転換期を迎え、それまでの施設介護から自宅か施設かを選択できるようになったといわれているが、政策的にはまだ未整備であり、住宅が福祉の基盤として認められることができたにとどまっていた。高齢者施設は量的に完全に不足している状況の中、高齢者の増える速度が著しく、「脱施設化」を支える自宅支援サービスも整備されない中、生活にゆとりのある高齢者が自衛手段として有料老人ホームを選択するケースが増えていた。有料老人ホームには手が届かない多くの高齢者は、家族の介護に頼ることになり、「社会的入院」が社会問題化していた時代でもあった。

そうした中でも、やはり「自分の家や街で住み続けたい」というのが人間の本質的な欲求であると考え、著書『迫りくる高齢化時代』の中で、中西が提案した新しいコミュニティの仕組みが「シルバー・コア」である^{15、16、17}。

「シルバー・コア」とは、高齢者が安心して、快適な生活を送れることを目的として、各学校区単位に整備された高齢者コミュニティを想定したものである。高齢者のための各種サービス機能が集中する中心施設をシルバー・コアと名づけた¹⁸。送迎バスをフルに活用し、家庭や高齢者施設に居住する高齢者が毎日利用できるようにする。シルバー・コアに通うことのできない高齢者には、入浴・給食・日用生活を支援するサービスがコアから高齢者のもとに提供される。またコミュニティ内のすべての住戸とコアは24時間緊急通報システムで結ばれるものとした（図6）。このシルバー・コアでは、元気な高齢者から介護が必要な高齢者まですべての高齢者が通うことを前提に、仕事・散歩・サークル活動・スポーツ・学習・給食・診療・リハビリ・介護・入浴などの様々なサービスを想定したものであり、これまでの福祉施設のイメージとは全く異なるもの

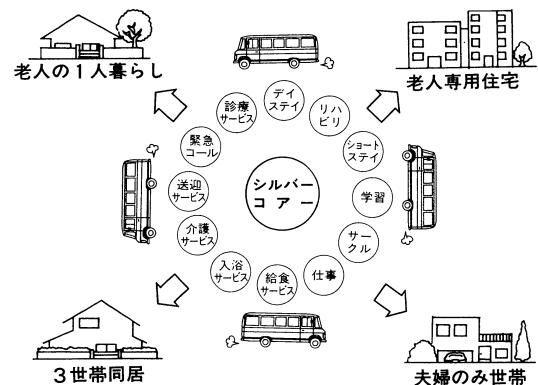


図6 シルバー・コア提案の概念図
「迫りくる高齢化時代」岸本幸臣編著 P105より

である。

施設に高齢者を集めて集中的に介護サービスを行うシステムは、高齢者の希望にはすぐわないものの、介護の効率や合理性から見れば好ましいとされていた。高齢者の住まいをそのように集めてしまうのではなく、住まいとケアを切り離し、高齢者の住まいは幅広い選択肢の中から選べる状況のままでいながら、高齢者を集めることで、ケアの合理性を図ることから考えたものであった。また、ケアが必要になったからということで、どこかに行かなければならないという制度は非常に精神的な苦痛を伴うものである。ケアが必要な人だけでなく、すべての高齢者を集めて、これからの生活に求められる新しい知識吸収の場としたり、働く場の提供を行ったり、体力や能力や活力を維持するための種々のサークル活動を行ったりできる、前向きで明るい、総合的な場として提供できないものかと考える。つまり、小学校に通う子どもたちのように、毎日一定の時間を共有しながら、ケアも予防も学習も仕事も行えるシステムを作ることが大切だと考えたのである。

4. シルバー・コアの長所

エイジング・イン・プレイスが高齢者の持つ本質的な「住み慣れた場所や街に住み続けたい」という欲求を満たすものであるとするならば、まさしく、シルバー・コアもその欲求を満たすものに他ならない。高齢期の住み替えや転居は、高齢者にとってうつ病や認知症の原因になるとも言われるほど、ストレスの大きなものであると考えられている¹⁹。新しい環境への適応や人間関係の再構築などストレスの多い転居は、高齢者に限らずとも出来るだけ避けたいものである。その上、高齢者の転居の場合には、その理由が、自身の健康上の不安や介護の必要性和関連性を持つことも多く、積極的な希望に沿った転居ではない場合が多いこともストレスを増大させる一因となっていると思われる。

また、高齢者にとって新しい人間関係を築く仕掛けとなることは、非常に重要なことではないだろうか。住まいや地域によっては、すでにコミュニティの中でのつきあいが成熟化していて人間関係が良好な人々や地域もあるが、高齢になってからの転居や心身の事情等により、つき合いのない高齢者も多くなってきている。『平成26年版高齢社会白書』によれば、一人暮らしの男性に人との交流が少ない人や頼れる人がいない人が多いという²⁰。定年まで仕事中心の生活をしてきた人が、新たにコミュニティに参加したり友人を作ったりすることには、きっかけや介入者が求められる場合も多いのではないだろうか。単身高齢者では、孤立死（孤独死）を身近に感じる人が4割を超えていると同白書では指摘しており²¹高齢者の不安を感じさせる。

また健常な高齢者を集めることには、高齢者の生きがいの確保や健康維持に役立つだけでなく、高齢者がいつ急に体調を崩すかわからないという面でも長所がある。当日の体調や、急な体調変化に合わせたプログラムに対応できることは非常に重要である。現行の介護保険では、介護が必要になった時に誰かがそれを申請し、また必要度をチェックするための審査に多くの

手間をかけている。本当に必要になったときに、申請を的確なタイミングで誰が行ってくれるのか、高齢者が不安になることも多いのではないだろうか。そうした不安を軽減し、必要な時に必要なケアが受けられることは、高齢者にとっても大きな安心感をもたらすことができる。

一方、行政やサービス提供の側からみた長所はどうだろう。サービスを提供する側からいえば、高齢者を集住させることはできなくても、高齢者を集め、集約した場所でサービスを提供することは効率的ではないだろうか。また、高齢者を集めることで、すべての高齢者がサービスを受ける側という認識を持つのではなく、高齢者自身がそのサービスの担い手となることも可能ではないだろうか。換言すれば、介護の一翼を担うことさえ可能なのである。ボランティア貯金のように、自身の介護の担保とするような方策も考えることが可能である。これまでの能力を生かした仕事をするだけでなく、ここで学び、それを生かした仕事を担うことも求められるのではないだろうか。コミュニティビジネスの観点から、高齢者がその担い手となることで地域に貢献し、人間関係を広げることの喜びを味わっている人が少なからず存在すること、さらに、高齢者のためのビジネスとして展開することが可能であることも指摘されるようになった²²。つまりこのシステムにより、介護の必要のない高齢者に生きがいや役割が与えられ、コミュニケーションが増すことにより、高齢者を元気にすることができれば、それが最も社会保障費の削減に寄与することとなるのではないだろうか。

そして、何よりもこのシルバー・コアの最も優れたところは、介護者にとってのメリットが大きいことであろう。介護者本人が高齢者であってもそうでなくても、介護の負担は計り知れない。その負担とストレスを軽減する最も有効な手立ては、日中の決められた時間であったとしても、完全にその負担とストレスから解放することではないかと考える。家族形態の変化とともに、育児不安も増大し、育児ノイローゼに悩む母親の増加や、児童虐待も深刻な社会問題となってきたが、育児以上に期間が長く、終わりの見えない介護の問題に心を痛めている高齢者がたくさんいることは意外に見過ごされてきているように感じられる。高齢者自身が自身の健康や老後生活に不安とストレスを持ち、さらに、同居家族の介護に心身ともに消耗している状況の中、介護を実際に担当している高齢者（老老介護の担い手）においては同様な状況にある理解者との交流や、仕事をしながら介護を担当する壮年世代においては、時間的ゆとりを与えることが大変有効であると考ええる。

5. エイジング・イン・プレイスに求められるもの

少子化や家族形態の多様化により、高齢者が3世代で暮らす世帯は減少する一方、親と未婚の子のみの世帯と夫婦のみの世帯は増加傾向にある。高齢者単身の世帯も非常に多い傾向が続いている（図7）²³。

冒頭で述べたように老老介護が半数を超えた状況を考え合わせると、親と未婚の子の世帯でさえも、双方が高齢者の率が高まっている状況であり、今後の介護に不安をもつ世帯の多さが

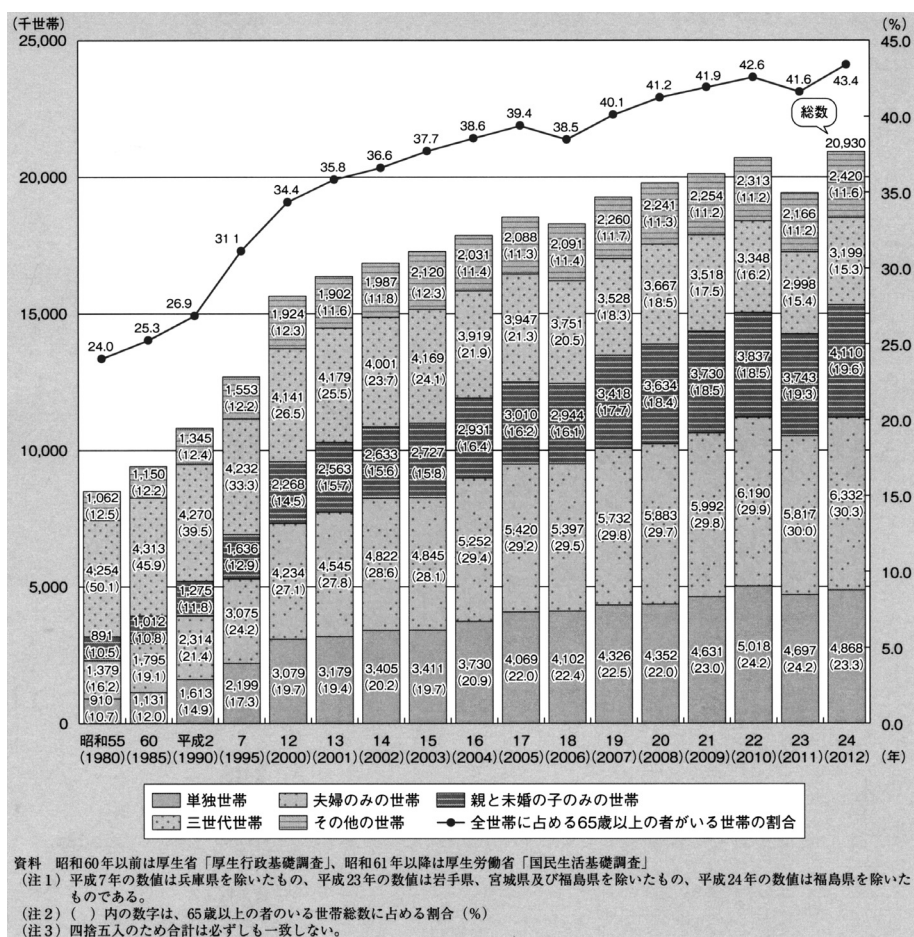


図7 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合(世帯構造別)と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合
 平成26年高齢社会白書(註18) P13より

うかがえる。また親と未婚の子の世帯も、夫婦のみ世帯も、いずれは高齢者の単独世帯へと移行する可能性が高い。たとえ虚弱化しても高齢者が住み慣れた家や街で住み続けることへの希望は多いが、エイジング・イン・プレイスが本当に実現するためには、高齢者が単身でも生活できる社会的な基盤の整備が不可欠であるといえる。

高齢者はいつ健康状況に変化があり、急に体調を崩したり急にケアが必要になったりするか予想できない。呼び寄せ高齢者へのヒアリングをまとめた伊藤シヅ子氏によると、高齢になってから子ども世帯に呼び寄せられて高齢者が転居を行う理由の一つにも親と子の双方にその不安があるという。単独で暮らす高齢者でも安心できる仕組みと支援がどうしても必要であると考え²⁴。介護保険制度の限界を感じさせるこの問題に対して、対処する新たな取り組みも広まりつつある。東京都大田区の地域包括センター入新井では、2009年8月、介護保険制度の利

用に際して窓口に来ない人や来られない人に対応するため、地域内の自治会、民生委員、介護事業者、NPOなどと連携し、『おおた高齢者見守りネットワーク』を設立し、65歳以上の高齢者の緊急連絡先や健康状態などの情報を登録する制度を始めた。このシステムは好評で、2012年から大田区の地域福祉課が事業を引き継いでいるだけでなく、広島県竹原市、東京都中央区、茨城県土浦市などに広がって行っているという²⁵。一定年齢を超えた高齢者がいつ健康を害しても、またどのような居住状態にあっても、そして介護者が身近にいらなくても、まず高齢者の状況を把握し、その変化に対応できる体制づくりは極めて重要な対応であると考えられる。

また、困ったときに行政等が対応できる状況が必要であるだけでなく、高齢者が自ら社会との関わりを持続けることも非常に重要であることを忘れてはならない。

前出の伊藤氏は、全国老人クラブ連合会が行った調査の結果として、80歳以上の高齢者の外出が、高齢になるにしたがって減少するとともに、近隣や友人との交流も少なくなり、家に閉じこもりがちになることを指摘している。住み慣れた町に住み続けていてさえも、だんだん外に出るのが億劫になってくる状況の中、それまで近所づきあいのなかった定年退職者や、子どもに呼び寄せられて馴染みのない土地に引っ越した高齢者が、新しく近隣とのかかわりを持つために自分から積極的に参加していくことはかなり困難である。2010年度の「第7回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果」においても、日本の高齢者の近所の人との交流の少なさは際立っており（表1）、地域コミュニティを活性化させることの必要性を感じさせる²⁶。

また高齢者が生きがいを持つことの大切さは早くから論じられ、そのことが高齢者の健康にも寄与すると考えられてきた。1999年に高浜市では元気な高齢者への憩いの場の提供も見据え

表1 近所の人たちとの交流

平成22年度「第7回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果」P60

(%)

	日 本							ア メ リ カ						
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
1 ほとんど毎日	15.6	17.5	15.9	13.9	21.0	24.6	22.7	34.8	38.3	32.2	27.5	29.2	24.3	29.4
2 週に4、5回	8.8	10.4	13.8	10.1	11.7	8.8	9.4	12.7	14.2	15.3	13.2	7.6	8.1	11.3
3 週に2、3回	20.6	20.2	24.3	22.6	24.4	20.4	19.9	22.7	19.3	18.6	21.6	20.6	19.2	17.7
4 週に1回	21.4	20.2	21.0	26.2	17.4	18.8	16.3	21.1	19.5	11.5	14.5	16.6	17.7	12.4
5 ほとんどない	31.9	31.5	24.3	27.0	25.5	27.4	31.6	7.0	7.0	21.5	21.7	25.0	30.7	29.2
無回答	1.6	0.2	0.6	0.2	-	-	0.1	1.7	1.8	1.0	1.4	1.0	-	-

	韓 国						ド イ ツ					スウェーデン	
	第1回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第5回	第7回
1 ほとんど毎日	43.4	55.3	47.0	58.9	58.7	40.9	29.2	32.6	33.4	39.4	40.5	32.5	33.1
2 週に4、5回	12.0	10.7	18.1	9.7	8.5	18.0	15.6	21.0	10.6	12.4	13.2	8.2	11.2
3 週に2、3回	13.9	10.5	14.5	9.1	9.2	16.5	27.8	22.3	24.0	21.8	22.6	18.5	20.9
4 週に1回	13.4	8.7	10.0	7.9	7.8	11.7	9.9	10.6	12.3	13.3	14.8	19.8	17.2
5 ほとんどない	17.0	14.8	10.4	14.5	15.7	12.8	17.3	12.3	19.7	13.0	8.6	21.1	17.6
無回答	0.2	-	-	-	-	-	0.3	1.2	-	0.1	0.2	-	-

注) 1の項目は、第4回は「毎日」。

た宅老所を3か所開設した²⁷。閉店になった家具店や老人ふれあいの家、保育園の隣接地を利用し、見守りの必要な高齢者の利用できる場として、65歳以上の利用者相互間のコミュニケーションの場を提供した。地域のつどいの場がエイジング・イン・プレイスのためにも重要になってきていることは、前出の松岡氏も指摘している²⁸。「コミュニティカフェ」や高齢者の居場所のためのレストランをNPO法人などが開設し運営するケースは増えているようである。スウェーデンでも、在宅への比重が増し、家族ケアへの依存度の増大やリハビリの不足などの問題が表面化している中、高齢者を健康にするためのミーティングスポットが注目されているという²⁹。定年後に高齢期の新たな生活を始めるにあたって、新たなコミュニケーションの場を持つことは、豊かな生活の基盤となるのではないかとと思われる。

エイジング・イン・プレイスを実現するためには、まず高齢者が単独で居住しても安心して、生きがいを持って生活できることが重要であるといえる。要介護者も介護担当者も、いずれもが生きがいを持ち、社会とのつながりを持つことができるようになることが、一番重要なことではないかと思われる。

また、介護を担当する家族等の負担やストレスについては、もっと配慮されるべきであろう。現在育児ストレスでノイローゼになる人や、児童虐待が社会問題化しているという状況もあるが、育児のように終わりの見えるものではなく、介護はその何倍もの期間、終わりの見えないストレスと向かい合わなければならない。介護担当者自身も年齢を重ね、体調に自信の持てなくなる中、その不安や心労は非常に大きいといえる。介護担当者がストレスフリーになることのできる時間を確保できるために、デイケアやデイサービス、ショートステイ等があるが、いまだ十分にストレスから解放できている状況にないといえる。介護負担の軽減のためには、地域で高齢者を支える社会の実現が求められているのではないだろうか。

現在は、シルバー・コアがより良い形で機能するためには、定年を迎えた高齢者が一定期間（定年年齢により延期可能）義務教育的な制度として実施するのが良いと考えている。子どもたちが学校で新たなことを学び、新たな能力を身につけ、そして新たな人的交流の基盤を得るのと同様に、高齢者もこれからの生活における知識や能力を学び、そして、人的なつながりを強化することが非常に有効であると考えからである。そして、その期間の後は、大田区のように登録者として自由な生活を送ることも、その後もデイケアやデイサービスの場として活用することや、そこでのコミュニティに関わりを持続けることを選択できるような制度が望まれる。

少子高齢社会において老々介護が増え、高齢者のストレスが浮き彫りになる中、エイジング・イン・プレイスがすべての人にとって望ましい選択となるような社会基盤づくりのための条件をさらに検討し、シルバー・コアに求めているものが、どのような形で地域社会に実現できるのかについてさらに考察を深めたいと考える。

註

- 1 警察庁 警察政策研究センター・慶應義塾大学 太田達也（2013）「高齢犯罪者の特性と犯罪要因に関する調査」
<http://www.npa.go.jp/keidai/keidai.files/pdf/essay/20131220.pdf>（最終アクセス：2014年10月24日）
- 2 「強盗と詐欺で一人暮らしの割合が高く（47.0％と42.1％）、＜中略＞殺人、傷害、窃盗は一人暮らしが32％前後であるが、我が国の65歳以上の高齢者のいる世帯の家族構成で一人暮らしが22.4％であることを考えると、高齢犯罪者は全般的に一人暮らしの割合が高い」と指摘されている。（前掲（1）p.127）
- 3 第4章 高齢者犯罪の要因—全国実態調査（第3調査） 7項「家族関係」（前掲（1）p.128）
- 4 法務省『平成20年度 犯罪白書』「第二部 高齢犯罪者の実態と処遇」p.40
<http://www.moj.go.jp/content/000010212.pdf>（最終アクセス：2014年10月24日）
- 5 前掲（4）書 p.44
- 6 厚生労働省 「平成25年 国民生活基礎調査の概況」p.33
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/>（最終アクセス：2014年10月24日）
- 7 IV介護の状況 3 主な介護者の状況、4 同居の主な介護者の悩みやストレスの状況（前掲（6）p.35）
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/dl/05.pdf>（最終アクセス：2014年10月24日）
- 8 『福祉住環境コーディネーター検定試験3級公式テキスト』2014年改訂2版 東京商工会議所発行 p.12
- 9 『エイジング・イン・プレイス（地域居住）と高齢者住宅 —日本とデンマークの実証的比較研究—』松岡洋子著 新評論 2011年
- 10 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』解説
<https://kotobank.jp/word/%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%82%BC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-154769>（最終アクセス：2014年10月24日）
- 11 前掲（8）書 p.38
- 12 前掲（9）書 p.21
- 13 「スウェーデンの高齢者住宅とケア政策」奥村芳孝 海外社会保障研究 Autumn 2008 No.164
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/18879304.pdf>（最終アクセス：2014年10月24日）
- 14 『迫りくる高齢化時代 —あなた自身の住まいと暮らし—』岸本幸臣・毎日新聞社編著（社）国民住宅建設協会発行 岸本幸臣・中西真弓著 1988 p.114
- 15 シルバー・コアの説明は前掲注（14）p.120
- 16 「定年後が楽しみ —シルバー・コア構想」中西真弓 1988.10.14 朝日新聞
- 17 『少子高齢化時代の都市住宅学 —家族と住まいの新しい関係—』広原盛明・岩崎信彦・高田光雄編著 ミネルヴァ書房 2002年 第9章「新しい高齢者居住のかたちとコミュニティの課題」中西真弓 p.136
- 18 提案時は「シルバー・コア」（前掲（14）および（16））としているが、その後の執筆時に「シルバー・コア」と表記を改めた。（前掲（17）） 本論ではシルバー・コアに統一して表記している。
- 19 『認知症介護 —現場からの見方と関わり学』三好春樹著 雲母書房 2014年
- 20 『平成26年版 高齢社会白書 全体版』内閣府 第2節「高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向」p.46
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/pdf/1s2s_6_5.pdf（最終アクセス：2014年10月24日）
- 21 前掲（20）p.48

- 22 『高齢者福祉の世界』直井道子・中野いく子・和気純子編 有斐閣 2014年補訂版 p.239
- 23 前掲(20) p.13
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/pdf/1s2s_1.pdf (最終アクセス：2014年10月24日)
- 24 『呼び寄せ高齢者 ―孤立から共生へ―』伊藤シヅ子著 風媒社 2010年
- 25 「独居高齢者にとって使いにくい介護保険」(矢部武の「孤立死」から「自立死」へ vol.2) 21世紀医療フォーラム 良い医者、良い医療を創るプロジェクト Good Doctor NET
<http://www.nikkeibp.co.jp/article/gdn/20120529/310505/> (最終アクセス：2014年10月24日)
- 26 『平成22年度 第7回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果』共生社会政策統括官 高齢社会対策 内閣府
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/pdf/2-7.pdf> (最終アクセス：2014年10月24日)
- 27 「介護保険制度と居住 ―高齢社会の居住を考える―」日本住宅会議シンポジウム 於：中京大学 1999年12月5日資料 p.35
- 28 「終章 未来へ向けての考察と提言」において、つどいの場合が必要であることと、脱施設化だけでなく脱高齢者住宅も重要であると提言している。前掲(9) 書 pp.319-334
- 29 『ニルスの国の高齢者ケア ―エーデル改革から15年後のスウェーデン―』藤原瑠美 ドメス出版 2009年 p.198